

京都観光の現状について

京都観光は、新型コロナウイルス感染拡大によって状況が一変した。京都府は緊急事態宣言が繰り返し発令されているため、特に環境が厳しい。コロナ前まで寺社や繁華街にあふれていた観光客の姿を見かけることはなくなった。京都の観光産業は裾野が広いだけに、地域経済全体が大きな打撃を受けている。

コロナ前の2019年に京都市を訪れた観光客は5352万人、観光消費額は1兆2367億円に上り、にぎわいはピークに達していた。旺盛な観光需要に対応するため、店舗の出店や改装といった設備投資が盛り上がり、雇用も増えていたところにコロナ禍が直撃した。多くの事業者は無利子・無担保の制度融資でやりくりしているものの、売り上げ回復のめどが立たず、途方に暮れている。

市観光協会の集計によると、4月の市内主要ホテルの客室稼働率は20・6%にとどまった。4月は本来、書き入れ時だが、コロナ前の2019年4月に比べ70ポイント近く下落した。「京都ホテルオークラ」などを経営する京都ホテルは今年3月期に19億円の純損失を計上し、2年連続の赤字となった。今年に入ってゲストハウスの運営会社が18億円の負債を抱えて民事再生手続きに入った。

観光は京都の基幹産業でもある。宿泊関連だけでなく、小売り・流通、サービス、運輸、建設・不動産など多様な業種が関わっているため、観光の低迷が長期化すれば京都経済の地盤沈下につながる。祇園祭の山鉦巡行が2年連続で中止となり、芸舞妓の舞台も再開できずにいる。伝統的な技術や芸能の継承を危ぶむ声まで出始めた。

それでも1200年の歴史を持つ古都・京都のポテンシャルへの期待は消えていない。コロナ禍にあって、ホテルオークラと三菱地所が真宗大谷岡崎別院境内に、帝国ホテルが祇園甲部歌舞練場隣接地にそれぞれ高級ホテルを開設する計画を発表した。多くの市民も再び世界中の観光客を迎える日を心待ちにしている。

京都新聞社 報道部政治経済担当部長 猪口健司



コロナの緊急事態宣言が発令され、人通りが激減した先斗町
(2021年4月、京都市中京区)



マスク姿で稽古に励む祇園甲部の舞妓たち
(2021年3月、京都市東山区)